

「過去完了形の語法——時間副詞 (“~ago”, “yesterday”) との共起関係について——」

加 島 康 司

1. 問題提起

我々がいる現在から、過去に起こった出来事を考える時、その捉え方はいくつかある。それを現在とは関係なく、単なる過去の出来事として切り離して考えることも出来れば、何らかの形で現在と結びつけて考えることもできる。そうした物の見方を言語で表現する時、時間関係を表す一連の副詞表現の選択という問題が生じる。

物事を見る基準点を「現在」に置き、出来事を現在と切り離して見れば、動詞表現は過去時制になり、その時間関係は、例えば、“yesterday”, “two days ago” などの表現によって示される。これらは出来事を過去の特定時に限定する副詞句である。基準点を「過去の一時点」に置き、それ以前の出来事を見た場合、その時間関係は、例えば、“three days before” という表現などによって示される。そのように規範文法は教えてくれるが、現実には、過去の出来事を現在と関連づけて捉える現在完了形や、過去の一時点より更に時間的に遡った出来事を表現する過去完了形の文において、次例のように、過去の一時点を示すはずの “~ ago” や “yesterday” という表現を、「時」を示す副詞句として使用している事例が多数見受けられる：

- (1) Two months ago he had been offered cocaine at a law school party. [Firm, 2] ¹⁾
- (2) A handsome mince-pie had been made yesterday.²⁾

一見、非論理的と思われる表現が、英米の作家達の作品の中に多数見受けられると言うことは、こうした語法が誤りであるどころか、むしろ、一つの何らかの意味・ニュアンスを表す語法として確立していることを示している。本稿は、過去の特定時を表す副詞句“~ ago”, “yesterday”との共起関係を通して、過去完了形の用法を調査することを目的する。

2. 過去完了形の基本的用法

過去完了形の基本的用法は、基準点と出来事の時間関係から、2つの用法に大別される。両用法とも、「過去の特定時」を基準点にして物事を捉える点で共通している。

2.1. 「経験」「完了・結果」「継続」

最初の用法は現在完了形の用法から類推して説明しよう。現在完了形の用法には、機能的に分類すると、「(現在までの) 経験」, 「(現在における動作の) 完了・結果」, 「(現在までの動作・状態の) 継続」とがあり、それらに共通しているのは、過去の出来事を何らかの形で、「現在」と結びつけて捉えているということである。この場合、出来事を見る基準点は「現在」である。この基準点をそのまま「過去の一時点」に移したのが、過去完了形の用法ということになる。つまり、「(過去の特定時までの) 経験」, 「(過去の特定時までの動作の) 完了・結果」, 「(過去の特定時までの動作・状態の) 継続」ということになる: I knew him well because I had met him many times. (経験); When I got to the theater, the play had already begun. (完了・結果); Frank had been sick a week when the doctor came. (継続)³⁾

2.2. 「過去の過去」(大過去)

過去完了形のもう一つの用法は、現在の時点から見た過去の出来事を、更に過去に移す用法である。つまり、過去に起こった出来事を、現在と結びつけずに表現する時は、過去時制が使用されるが、過去完了形の場合、

ある過去の一時点（基準点）よりも更に前に起こった出来事を表現するということになる：She recalled the telephone conversation they had had a few days earlier. [Stars, 259]

2.3. 過去の特定時を示す副詞表現

“ago”, “yesterday”, “last night”, “last week”, “last year”, “when we were at school”, “in 1965” その他の副詞的表現は、発話者が基準点を「現在」において過去の出来事を捉えていることを示し、しかも、その出来事を「過去の一時点」に限定する表現である。従って、その性格ゆえに、本質的に、現在完了形や過去完了形と共起しないはずである。例えば、Swan (1980) は “ago” の用法について、以下のように述べている⁴⁾：

Do not confuse the adverbs *ago* and *before*. *Ago* is used when the ‘point of reference’ is the present : it means ‘before now’. *Before* is used when the point of reference is not the present : it means ‘before then’, ‘earlier’. Compare :

I started working for this firm three years ago.

Last summer, I finally left the firm that I had joined eighteen years before.

従って、以下の文は非文となる：

(3)* I’ve been reading yesterday.

(4)* They’ve come last Monday⁵⁾

(5)* John has left three days ago.⁶⁾

しかし、それにもかかわらず、例文(1)(2)が示すように、過去の特定時を示す副詞句が現在完了形や過去完了形の文中で使われることは事実である⁷⁾ 以下、過去の特定時を示す副詞句と共起する過去完了形の用例を分

類し、どういふ場合に両者の共起が可能か、その理由を考えてみたい。

3. 過去の特定時を示す副詞句 (“~ago”, “yesterday”) と共起する過去完了形：用例の分類

3.1. 間接話法

直接話法を間接話法に変える時、代名詞や時制などいくつか変更すべき事柄が生じるが、「時」に関係する副詞句は以下のように変更するのが原則である：ago→ before, earlier, previously ; yesterday→ the day before, the previous day ; now→ then ; today → that day ; tomorrow → (the) next day, the day after, the following day ; last night→ the previous night ; next month→ the next month, the month after など。

そして以下のように使うのが原則である：(“ago” の場合) They left the district two days ago. → I was told that they had left the district two days before / earlier / previously.

(“yesterday” の場合) He said to me this morning, “I bought the book yesterday.” → He told me that morning that he had bought the book the day before.⁸⁾

しかし、こうした操作をあまりに機械的に適応すると、現実から遊離してゆくことになる。また、規則の通りに書き換えられていない文を即座に非文と判定することになりかねない。Jespersen (1931) は、例文(6)を間接話法にした場合として、例文(7)(8)を挙げている。(8)の場合、副詞 “yesterday” が、規則が教える “the day before” という形に換えられていず、過去完了形と共起しているが、非文というわけではない：

(6) He said “There was some shooting yesterday.”

(7) He said that there had been some shooting the day before.

(8) He said that there had been some shooting yesterday.

この場合、元の発話者Aが例文(6)の被伝達部を発言した日に、別の発話者Bが例文(8)を発言したならば、出来事の時間関係は発話者A、Bにとって同じことになるので、副詞“yesterday”は“the day before”に換える必要はないのである。話法の転換は、あくまで、実際の状況を踏まえて行われなければならない。このように、状況次第では、“~ago”、“yesterday”と過去完了形の共起は可能である。

3.2. 仮定法

以下の例文においても、過去完了形の文中で“ago”が使用されている：

- (9) The mud and the stench and the sight of those dirty, shivering, gray-faced men were as fresh in his mind as if it had been only a few hours ago. [Imperial, 65]

(泥と悪臭、そして、薄汚れて、ふるふる震えていた、青白い顔の男たちの様子が、あたかもそれがたった数時間前のことであったかのように、彼の心にまざまざと残っていた。)

- (10) Now it seemed as if that had been several lifetimes ago, she thought sadly. [Town, 306]

(もう、それは三代も四代も昔のことであるかのように思えるわ、と彼女は悲しく考えた。)

上記の例文は「形式上」は過去完了形だが、仮定法過去完了であるので、意味の上では、あくまで過去のこと言及しているため、時を示す副詞句として、“~ago”形が使われているものと思われる。過去完了形ではないが、以下の例文においても、完了形と“ago”が共起している理由は同様である：

- (11) ‘Yes,’ Keller was studying her thoughtfully. It was a question she never would have asked one year ago. [Stars, 391]

- (12) He resented having to defer to them, to plead for jobs from men whom a year ago he would not have deigned to notice. [Imperial, 66]

3.3. “~ago” が漠然とした過去を表す場合

本来“~ago”という副詞句は過去のある時間を特定化する働きを持つため、過去時制とともに使われるのが普通だが、“years ago”, “long ago”, “a long time ago”などの表現になると、これらは、過去の特定時というよりは、むしろ、漠然とした過去を表し、「ずっと以前に、とうの昔に」という意味を持つように思われる。従って、過去完了形とともに用いられても、なら矛盾を生ずることはなく、過去時制で述べられている出来事と、過去完了形で述べられている出来事の時間的隔たりは明確に示される。

- (13) The recital was a triumph, and afterward, the green room was packed. Philip had long ago learned to divide the crowd invited to the green room into two groups: the fans and other musicians.

[Stars, 298] (リサイタルは大成功だった。そして、その後、楽屋は人々でごった返していた。フィリップはとうの昔に、楽屋に招かれた大勢の人々を2つのグループに分けることを学んでいた：ファンと他の音楽家というふうに。)

- (14) She had smoked years ago but gave it up under the steady thump of criticism from Richard. [Bridges, 33]
- (15) She had gone upstairs a long time ago and changed into her new pink bathing suit. [Town, 3]
- (16) It was strange to look at them, these two old people who had not seen one another for half a century, and to think that all that long time ago he had loved her and she had loved another.

[Home, 21-22]

3.4. 視 点

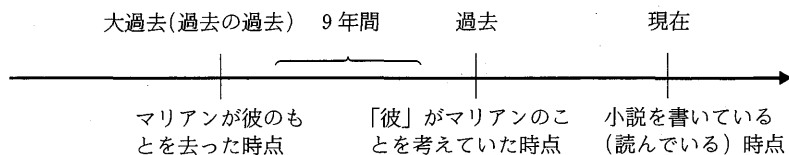
文学作品を読んでいると、「過去完了形+“~ago”, “yesterday”」という用例をよく見かける。本稿の準備段階の用例収集でも、このケースが一番多かった。一般的に小説は過去時制で表現されるが、文学的な技巧の1つとして、著者は、登場人物と同じ世界に入った上で、登場人物と同じ視点に立ち、そこから物語を語ることで、読者をその世界に誘い込もうとする。つまり、著者は物語の中で描出語法を駆使し、一つの世界を構築してゆくのである。そうすると、過去の出来事があたかも眼前で生じているかのような効果を生み出す。従って、その世界に視点を置いている限り、それより以前の出来事は“~ago”で示すことになる。ただし、物語の場自体は過去時制で書かれているので、それ以前の出来事は、たとえ“~ago”が使われていたとしても、過去完了形にならざるを得ない。従って、この場合は、技巧上の必要性と、文法上の制約の混交の結果、「過去完了形+“~ago”, “yesterday”」という形式が生じるのではないかと思われる。

- (17) He thought about Marian. She had left him nine years ago after five years of marriage. He was fifty-two now; that would make her just under forty. [Bridges, 4]

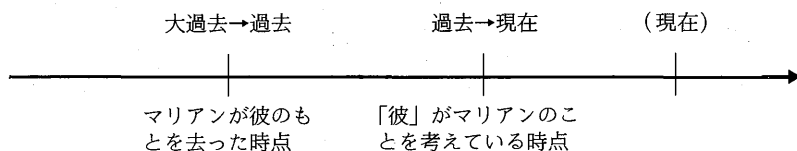
(彼はマリアンのことを考えた。彼女は5年の結婚生活の後、9年前に彼のもとを去っていた。彼は今や52歳になっていた。ということとは、彼女は40歳近くになるということだ。)

以下、例文(17)の、現実世界における出来事の時間関係と、視点を移動した小説世界の時間関係を図示する：

【現実の世界】



【小説の世界】



著者・読者が、登場人物の生きている世界・時間まで降りて行き、その結果、ここが小説の世界では現在となる。

←◎ 視点の移動

従って、マリアンが去ったのは、ここから、9 years ago

He was fifty-two now;... (彼は今や52歳になっていた。) という文中の副詞 “now” から、著者が視点を過去に移動させて、そこを現在としていることが分かる。

- (18) Deep autumn was birthday time for Francesca, and cold rain swept against her frame house in the south Iowa countryside. She watched the rain, looked through it toward the hills along Middle River, thinking of Richard. He had died on a day like this, eight years ago, from something with a name she would rather not remember. [Bridges, 17]

Deep autumn から Richard まで、たんとんと事実を述べ、一つの状況・

世界を読者の心に築き上げ、次の He had died on a day like this, eight years ago,... という文で、“eight years ago” という表現によって、読者を一気にフランチェスカのいる世界へと引き込んで行く。

次の例文中の副詞句は、“last year” である。これも、“～ ago”, “yesterday” 同様、過去の特定時を表す表現なので、例示する：

(19) She looked around the enormous empty ballroom and shivered.

Last year, at her birthday party, this room had been filled with her friends, filled with music and laughter. She remembered that day so well... [Stars, 16-17]

上の用例は、主人公 (= She) が自分の誕生日を祝うパーティ会場にかけつけると、そこには誰もいないので呆然としている場面である。最初の文では、著者は主人公との間に距離を置き、場面を客観的に描写している。しかし、次の文において、実際は大過去の出来事である彼女のバースデイ・パーティを“last year” と描写していることから、著者は視点を切り替え、主人公の世界に入り込み、そこから物事を見ていることが分かる。

これ以上用例を示すことはしないが、この用法は「過去完了形+過去の特定時を示す副詞句」の中で大きな位置を占める¹⁰⁾

3.5. 局面転換

毛利 (1980) は、完了形は tense でもなく、aspect でもなく、phase (局面) をあらわすという Martin Joos の説をもとに、完了形を使うことで出来事が新しい局面に移ってゆくことを示す、と主張している¹¹⁾ 過去完了形をその基本的用法のみに限定して理解していると、この用法はなかなか分かりづらい。「局面転換」という概念自体が抽象的なものなので、その概念適用はいきおい読者の解釈力へ依存することになり、その結果、例文中の過去完了形の解釈をめぐるファジーな点が出てこざるを得ない。現に、「局面転換」の例として挙げた下記例文の下線部の完了形は、3.4.

で述べた用法, つまり「視点の移動」とも解釈されうるのである。ともあれ, 具体例で検討してみよう:

- (20) They heard of him on the China coast. For twenty years now and then he sent them presents; then there was no more news of him; when Tom Meadows died his widow wrote and told him, but received no answer; and at last they came to the conclusion that he must be dead. But two or three days ago to their astonishment they had received a letter from the matron of the sailors home at Portsmouth. [Home, 19-20]

(彼らは、彼が中国沿岸にいるという噂を聞いた。20年の間、ときたま彼はプレゼントを送ってきた; それから彼の消息は不明になった。トム・メドウズが死んだ時、未亡人は彼に手紙を書き、そのことを告げたのだが、返事はなかった; そして、とうとう彼らは彼が死んだに違いないという結論に達した。ところが、なんと驚いたことに、2~3日前、彼らはポーツマスの船員宿泊所の寮母から手紙を受け取ったのだ。)

上記引用例の最初の文 They heard of him on the China coast. から最後の文 (=下線部の文) まで、出来事は時間の流れに沿って順に描写されているので、そのような場合、文法的には、下線部は必ずしも過去完了形にしなくてもよい: → But two or three days ago to their astonishment they received a letter from the matron of the sailors home at Portsmouth. しかし、それをこのように過去時制で描写してしまうと、事実の単なる羅列・積み重ねになってしまう。しかし、52年前に出奔し、とうの昔に死んだと思われていた叔父が思いがけず半世紀ぶりに生家に戻って来るといふこの場面で、下線部の過去完了形を「局面転換」のためと考えてみよう。すると、最初の単語 “But” を境にして、それまでの事実の淡々とした描写、いわば静的な世界から状況が一変し、事態が新しい局面、動的

な世界へと転じて行くそのプロセスが実に巧妙に表現されていると解釈されるのである。そして、そのためにこそ、two or three days ago という過去時を表す副詞句は残しているものの、過去時制ではなく、過去完了形で書かれているのではないかと思われるのである。

4. 結論

本稿では、過去完了形と過去の特定時を示す副詞句との共起関係に焦点を絞り、その理由を考察した。その結果、一見、規範文法から逸脱していると思われるようなこの統語現象に、それなりの理由があることが分かった。3.1. 「間接話法」、3.2. 「仮定法」は典型的な文法領域に入るが、ここでは、状況に応じた書き換えや解釈が必要であることを具体例は教えてくれる。また、3.3. は“~ago”が過去の一時点ではなく、時間的に広がりをもった「漠然とした過去」を表示していることを、最後の2項目、3.4. 「視点」と3.5. 「局面転換」の具体例は、文学作品を書く作家達の工夫と表現力の豊かさを教えてくれる。

ともあれ、規範的教育の成果が高じてしまうと、現実の用例に対応出来ないということになってしまうので、注意を要する。書き換えなどの操作や規則の適用をあまりに「機械的」に行ってはならない。そして、厳密性をあまりに求めすぎると、規則と現実の用法との間にズレが生じてしまうことを忘れてはならない。¹²⁾

注

- 1) 例文について：①出典は例文の後に略称を用いて示してある。[] 内の最初が作品名、続く数字が頁を示す。作品のフルネームは参考文献一覧を参照せよ。②下線はすべて筆者が施したものである。③必要と思われる部分だけ日本語訳をつけている。
- 2) H. Poutsma, *A Grammar of Late Modern English*, Part II (Groningen : P. Noordhoff, 1926) 207.
- 3) 安井稔『英文法総覧』(東京：開拓社, 1982年) 84-85.
- 4) M. Swan, *Practical English Usage*. (Oxford : Oxford University Press, 1980)

- 5) (3)(4)とも, F. R. パーマー『英語動詞の言語学的研究』安藤貞雄訳(東京:大修館書店, 1972年) 92, 95.
- 6) 斉藤武生 鈴木英一『冠詞・形容詞・副詞』(東京:研究社, 1984年) 225.
- 7) 現在完了形と過去の特定時を示す副詞句が共起した例文は, 注10) の例文を参照せよ。
- 8) 小西友七『英語シノニムの語法』(東京:研究社, 1976年) 125.
- 9) O. Jespersen, *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part IV (London: George Allen & Unwin, 1931) 364. Jespersen は更に, He said that there was some shooting yesterday. も挙げているが, 本論とは関係がないので, 省略してある。
- 10) 視点の移動には以下の劇的現在 (dramatic present) の場合も含まれる。これは, 過去の出来事を現在時制で描写し, あたかも出来事が眼前で起きているかのような効果を出す: One Tuesday night, seven, maybe eight years ago, he doesn't show. He's not there the next week, either. I think maybe he's sick or somethin'. (Bridges, 169) (ある火曜日の夜, 7年いや8年前だったか, 彼が現れないんだ。次の週も現れないんだ。病気かなにかじゃないかと思ったもんだよ。) * 次の例文では, 知り合いになって13年間という継続を言うつもりが, 途中から13年前に知り合ったきっかけへと追想が移り, そのため, 現在完了でありながら, 特定時を指示する “~ ago” を使っている。安藤 (1983, p. 148) は途中で考えが変化することを追加観念 (afterthought) と述べているが, 要するに, 視点が変化することである: I'm sixty-four now, and it's been thirteen years ago today that we met when I came up your lane looking for directions. (Bridges, 138)
- 11) 毛利可信『英語の語用論』(東京:大修館書店, 1980年) 219-221. Jespersen (1931) が, 「生き生きとした描写」のためとして挙げた次の過去完了の文を例示し, その根底には「局面転換」がある, と言う: I had soon told my story. (じきに話を終えてしまった) * In three steps he had reached the door. (3歩とんだと思ったらドアの所へ行っていた)
- 12) 次の場合, 「構造上」, 完了形と過去の特定時を示す副詞句の共起が生じる: ①補文中において: He is rumoured to have come last Tuesday. (安井, 382); John is believed to have left three days ago. (斉藤・鈴木, 225) ②分詞構文中において: Having finished the homework yesterday, I am free today.
- また, 疑問詞 “when” を使った疑問文は, 出来事の起こった時間を限定, 特定化するわけだから, 本来, 完了形には使われないはずだが, 修辭疑問文の場合には, 疑問詞 “when” と完了形が共起する: When else have I seen her like this? (大江, 144) この文は, 答を求めて質問しているわけではない。「他にいつ私がこんな彼女を見たというのだ? (いや, 一度もない。)」と反語的に発言した修辭疑問文であればこそ, なんら矛盾を生ずることはないのである。また, 安藤 (1983, p. 151) は, 発話時までの期間を考えている時には, 現在完了相が使用される, としている: When have I ever had a secret from you? (いつ,

君に隠し立てをしたことがあるかね。) これも反語として解釈される。

参考文献

- 安藤貞雄『英語教師の文法研究』東京：大修館書店，1983年
- Close, R. A. *A Reference Grammar for Students of English*. Harlow : Longman, 1975.
- 細江逸記『英文法汎論』新版 東京：篠崎書林，1971年
——『動詞時制の研究』訂正新版 東京：篠崎書林，1973年
- Jespersen, O. *The Philosophy of Grammar*. London : George Allen & Unwin, 1924.
——*A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part IV. London : George Allen & Unwin, 1931.
- Hornby, A. S. *Guide to Patterns and Usage in English*. London : Oxford University Press, 1975².
- 木下浩利『英語の動詞一形とところ一』福岡：九州大学出版会，1991年
- 小西友七『英語シノニムの語法』東京：研究社，1976年
- Leech, Geoffrey N. *Meaning and the English Verb*. London : Longman, 1987²
- 三浦敏明『英語副詞の研究一 副詞の多様性一』東京：文化書房博文社，1991年
- 毛利可信『英語の語用論』東京：大修館書店，1980年
- 大江三郎『動詞（I）』講座・学校英文法の基礎 第四巻 東京：研究社，1982年
- パーマー・F. R.『英語動詞の言語学的研究』安藤貞雄訳注 東京：大修館書店，1972年
- Poutsma, H. *A Grammar of Late Modern English*. Part II. Groningen : P. Noordhoff, 1926.
- 斉藤武生 鈴木英一『冠詞・形容詞・副詞』講座・学校英文法の基礎 第三巻 東京：研究社，1984年
- 澤田治美「アスペクトから見た時点副詞類の意味と文法（上）（下）」『英語青年』1992年4月号 pp. 14-16. 同5月号 pp. 63-65. 東京：研究社
- Swan, Michael. *Practical English Usage*. Oxford : Oxford University Press, 1980.
- Thomson, A. J. & A. V. Martinet. *A Practical English Grammar*. Oxford : Oxford University Press, 1980³
- 植木五一『動詞（上）』現代英文法講座 第三巻 東京：研究社，1958年
- 安井稔『英文法総覧』東京：開拓社，1982年

例文は以下の作品から引用した。[] 内は本文中で用いた略称。

Clark, Mary Higgins. *All Around the Town*. New York : Pocket Books, 1992
[Town]

Doyle, Richard. *Imperial 109*. New York : Bantam Books, 1978. [Imperial]

Grisham, John. *The Firm*. New York : Dell Publish Co., 1991. [Firm]

Maugham, W. Somerset. “Home” in *Short Fiction 30—Charming British and American Stories*. Edited and annotated by Kazushi Kuzumi. Tokyo : Macmillan Language House, 1986. [Home]

Sheldon, Sidney. *The Stars Shine Down*. London : Fontana, 1993. [Stars]

Waller, Robert James. *The Bridges of Madison County*. London : Mandarin, 1993.

[Bridges]